

# 信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

## 課題図書 北杜夫 『楡家の人びと 第一部』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字程度で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)

北杜夫

『楡家の人びと』



第 395 回の YouTube 読書会の課題図書は、北杜夫の『楡家の人びと 第一部』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『楡家の人びと 第一部』 北杜夫 感想文

「こけおどし」、実質はないのに外見だけが立派に見えること。

その「天才的な見かけ倒しの精神」(新潮文庫 p.50)が大きく詰まって目立つ建物が「楡病院」なのだ。

表の豪華さと裏の「賄い」の部分の安普請、表の豪華な柱が実は芯が木材であることも隠そうとしない基一郎のその人柄がいまひとつ掴めない。

本名「金沢甚作」山形出身。この田舎くさい名を「楡基一郎」と改名してまでのし上がろうとした強い意思は、医者であり政治家にまで上り詰めた。

しかし、人の人生を善意まがいに関与し、全て自分の前進と拡大の欲求に利用する基一郎の姿は美しくない。

辛い人間、才能や学力のある人間を見抜くのも基一郎、それが全て自分の利益のためだけであったなら、子供であれば耐えられないだろう。

猫にも怒った顔は見せない基一郎、次女が縁談を破棄し自由恋愛に走った時の基一郎の鷹揚さ、宮中詣での大騒ぎ、実は記帳だけのものだったのにその大袈裟なパレードは滑稽でもあった。

出がけの高級車の幌に精神病患者が落ちてきた時の動じない態度にも、彼の深い何かがあるような、しかしそれらも実は芝居だったのかが謎であった。

出来の良い学習院卒の長女龍子と次女聖子、三女の桃子が出来の悪い子で家庭内では差別があった。

ブッデンブローク家のクリスチアンを思い出した。

桃子はまたブッデンブローク家のアントーニエの子供の頃を感じさせる部分もあるのだが、アントーニエは龍子気質であるとも思った。

そして楡家の長男の「欧州」が、父とその家族を見抜いているところから面白くなってきた。

(引用はじめ)

「お前は病院が大きいからそう思っているのだろうが、教えてやるが家には金なんぞ少しもない。みんなこけおどしだ」「それなのにあの女郎どもは、いつだって帝劇だ三越だとぬかしおる。いいか、桃子、この家がどん百姓の証拠に、たとえば誰一人芸術を解する者がいない。ピアノだって弾けやしない。芝居を見たって何がわかるものか。まともな本ひとつ読む者がいないじゃないか。まったく猿芝居そのままだ」(p.188、189)

(引用終わり)

欧州のこの言葉が、楡家の全てであり、彼がそれをしっかり客観視していたこともすっきりしてきて、より小説に深みがでてきた。欧州の存在は面白い。経理からごっそり学費を持ち出したのも、父への反抗なのか。

音楽が苦手だったのもブッデンブローク家と重なり、桃子はこの先もしかしたらハンノのような才能ある人間になるかもしれないと想像が膨らんでしまう。

農民にも芸術家肌はいるはずだ。

ブッデンブローク家にずっと仕えていた「イーダ・ユングマン」と重なる楡家の「下田の婆や」という人物。

婆やが米国を可愛がったと桃子が嫉妬して、米国をきつく木にしばりつけたり、山形土産の「のし梅」が嫌いな桃子が、「のし梅よりも嫌いな勉強」を無理やり強いられたりする。その表現に何度もクスッとさせられた。

姉たちの龍子や聖子と全く違う世界にいて書生や使用人、入院患者により近く接している桃子、その日常のドタバタ表現が子供の視点でとてもうまく表現されていた。

桃子がその経験からどんな人間になるかが楽しみだ。

1923年9月1日の関東大震災、楡病院の躯体は「こけおどし」を曝け出してしまう。

表面的に貴族的を装う楡家の人びとが、欧州、桃子、米国の成長でどのように崩れていくのかが興味津々である。

(おわり)

## 『楡家の人びと 第一部』 読書感想文

序盤から登場人物が多く、読み通せるか不安でしたが、意外と楽しく読めました。なんとなく、語り口が親切で読みやすいような気がします。

印象的なのはやはり基一郎氏です。患者や職員からは支持されているようですが、子供たちからはあんまり好かれてないように見えます。

個人的にも、見かけばかりを気にしているように描かれていて、いかに医者として優れていると言っても、父親としては尊敬できない人柄だと思いました。

長女龍子は、基一郎のように家や病院を優先するスタンスに肯定的で、次女聖子は否定的でした。

私も否定したいところですが、聖子の最期を思うと自信が持てません。

三女桃子は嫌々言いつつ結婚して、錯乱して旦那を苛つかせたり、下田の婆やに対してもひねくれた態度を取っていて、もう見ていられない具合になっていました。

基一郎に賛同できなくても、言いなりになって耐えるのが現実的な落としどころになるんでしょうか。こうなると、泣く泣く相撲の道を選んだ蔵王山こと辰次のことにも心配です。幸あれ、と願うばかりです。

後は、あまり関係のないことかもしれませんが、関東大震災の後、朝鮮人狩りが行われたことが描かれていて、恥ずかしながら全く知らなかったのが衝撃でした。

ネットで軽く調べただけですが、胸の悪くなるような話がたくさん出てきて、当時の不穏な空気の一部がうかがえるように思います。この小説の見方も変わりました。平成令和とは人々の心持ちがまるで違うな、と思いました。

以上感想文です。基一郎氏が亡くなって子供たちがどうなるのか、次巻以降楽しみです。

(おわり)

## 好事魔多し

「好事魔多し」という言葉がある。物事がうまくいっているときほど、思わぬ落とし穴がある、という意味だが、本書第一巻を読み終えて、この言葉の重みを改めて感じた。

楡基一郎は、先を見通し、時代を読み、精神科医としても一家の長としても、着実に地盤を築いていた人物である。まさに「良い流れ」をつくり出した人であり、その意味で成功者と言ってよい。しかし、その流れの中にこそ、後の揺らぎの芽がすでに含まれているようにも見える。

人生の流れには、良い時と悪い時がある。おそらく一生を通して見れば、どこかで均され、結果としては「トントン」になるのかもしれない。だとすれば重要なのは、良い時にどう振る舞うかである。良い時ほど気が緩みやすく、見えているはずの歪みを見過ごしてしまうからだ。

基一郎は先を見ていた。それでもなお、完全ではなかった。そこに人間の限界があるのだと思う。同時に、流れの中にいるときほど、その流れを外から見直すことの難しさも感じる。順調であること自体が、問いを手放させてしまうのではないか。

だからこそ必要なのは、「立ち止まる力」なのだろう。流れの中にいながら、あえて間を取り、いま何が起きているのかを問い直すこと。

うまくいっているときほど、構造を見直し、足元を確かめること。その小さな「止まり」が、後の大きな崩れを防ぐ契機になるのではないか。

このことは家族介護者である私自身が、特に強く感じるところでもある。

介護の現場は、まさに一期一会である。しかし、その一回一回をただ消費してしまうのではなく、その都度「その事実・現象をどう捉え、それをどう次につなげるか」を考えることで、経験は積み重なり、意味を持ち始める。流れに任せるだけでは、何も残らない。

人は最後に、自分の人生をどう振り返るのだろうか。「あれでよかった」と言えるのか、それとも「なぜあんなったのか」と悔やむのか。

その分かれ目は、日々の小さな判断と、そのときにどれだけ問いを持てたかにかかっているのではないか。

好調は、終わりの始まりにもなりうる。だからこそ、うまくいっているときにこそ、脇を締め、問いを持ち続ける。それが、この物語の第一巻から受け取った、ささやかだが確かな教訓である。

(おわり)

## 『楡家の人びと 第一部』読書感想文

『ブッデンブローク家の人びと』は商家のお話だったので、景気や天候の影響をもろに被っていましたが、本作は舞台が病院だから、そういうものにはあまり左右されないし、親から強引にもたらされる縁談も相手はゆうても医者なので、経済的な心配はないとか、このお嬢さんたちはトーニのような苦労はしないだろうとか思いながら読み進めましたが、そこはやはり日本版『ブッデンブローク』だけあって、それぞれにそれなりの物語があるようです。

楡家には音楽の素養が無いというところも『ブッデンブローク』と似ていました。成り上がりは文化的なところが欠けていると言いたいのかなあと思いました。

職人が聖子を見かけて「いやあ、トテシャンだなあ」と言う場面がありました。

小島よしおのギャグでしか聞いたことのないこの言葉が、美人という意味のドイツ語からきていることを知って、面白かったです。

徹吉がドイツに留学し、気おくれを感じながらの慣れぬ日々の描写の中で芸妓ぽん太という単語が出てきて、これは森鷗外の『百物語』にも出てきた芸者のことではと思い、調べてみるとやはりそのようで、ぽん太である鹿嶋あつのウィキには齋藤茂吉のエピソードも載っていて、ここを小説に取り入れたのかと答え合わせができたようで楽しかったです。

中心人物の基一郎はふざけた男なのか大人物なのか結局わからず、捉えどころがないまま死んでしまいました。私の好きなタイプではなかったのですが、これからは信頼のおけそうな徹吉、城吉兄弟の視点で物語が展開していくことを期待しています。

(おわり)

参考資料 齋藤茂吉 『三筋町界限』 第七章

[https://www.aozora.gr.jp/cards/001059/files/43793\\_21421.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/001059/files/43793_21421.html)

## 『榆家の人びと』 第一部 感想文

これは「ブッデンブローク家の人」に似ているお話だなと思いました。

全く題名も知らない作品だったけど、一族が没落していくのかな？とったりしました。

昔はよくある事だと思うけど結婚も親の決めた人とするというのもブッデンブローク家の人に似ているなと思いました。

あと見栄っ張りな感じも。

最後までまだ読めていないのですが最初の伊助爺さんの炊くご飯が美味しそうで食べてみたいなと思いました。

今回は最後まで間に合わなかったのですが、頑張って読んで追いつきたいと思います。

(おわり)

## 『楡家の人びと』 第一部 読書感想文

『ブッデンブローグ家の人びと』に触発されたことで知られる『楡家の人びと』は、一家の盛衰を通じて時代の変容を描く作品である。トーマス・マンが自らの家系とリュベック市民の没落を描いたように、北杜夫もまた楡家(齋藤家)を介して、大日本帝国における新興家族の発展と没落を描こうとしたのであろう。

第一部でとりわけ印象に残ったのは、基一郎の長女龍子である。龍子は楡家の中で最も「家」を重んじる人物として描かれる。次女・聖子の恋愛結婚をめぐり、龍子だけが最後まで強く反対し続けた。この頑な姿勢から、彼女の行動原理が個人的感情よりも家の存続と名誉に強く規定されていることがうかがえる。

この龍子は、北杜夫の母・齋藤輝子がモデルとされる。杜夫の娘で作家の齋藤由香は、輝子の評伝『猛女と呼ばれた淑女』の中で次のように述べている。

(引用はじめ)

「なんで男に生まれなかったのか」

精神科医であった父・齋藤紀一(北杜夫の祖父で基一郎のモデル)をして嘆かせたほどの器の大きな輝子のことだ。  
『猛女と呼ばれた淑女』9 ページ

茂吉(輝子の夫で徹吉のモデル)と輝子は四人の子供に恵まれたが夫婦仲は最悪だった。

(中略)いわば典型的なファザコンで、夫としても男性としても茂吉では満足できなかった。

(同 160 ページ)

(引用終わり)

輝子は9歳のとき、13歳年上の徹吉を婿養子として迎えた。この入籍時の年齢からも、父への並々ならぬ忠誠心が窺える。こうした齋藤輝子＝楡龍子的人格形成には、当時の学習院での教育の影響も大きかったと推察される。

(引用はじめ)

1907年(明治40)年1月、陸軍大将の乃木希典が学習院長に就任しました。(中略)乃木は厳格な教育方針を示し、女学部の生徒には「質素」であることを強調しました。乃木は明治天皇の大喪した1912(大正元)年9月まで院長の職にあり、学習院の教育に大きな影響を及ぼしました。

(引用終わり)

藤澤志穂子『学習院女子と皇室』83 ページ

龍子(輝子)は1895年生まれで、学習院女子部に入学したのは1908年である。したがって、乃木院長時代の影響を最も強く受けた世代と言える。この明治最後の教育を受けた龍子と、8歳年下で多感期を大正期に過ごした妹・聖子との間には、価値観に大きな隔たりがある。明治期の集大成とも言うべき規律と忠誠の教育を受けた女性こそが龍子であり、その価値観が楡家への深い献身として結実しているのである。

本作はこれから激動の昭和期へと突入する。明治の女である龍子が、楡家にどのように関わり、どのようにその没落の過程を生き抜いていくのか。今後の展開が大いに期待される。

(おわり)

## 風格と貫禄に関する雑考

私が主催している「某麻雀倶楽部」ではオンライン麻雀によって参加者と勝敗を競うのだが、インターネット上に巣食う数多(あまた)の兵(つわもの)どもは、雀聖である私との勝負にあえなく散っていった。

ところで今、私は自らを雀聖であると称したが、徒勞の果てにようやくして雀聖へと至った訳ではなく元より雀聖の風格が備わっているからしてオギャアと生まれたその日から、既に雀聖であっただけに過ぎない。ここで前述した「風格」とは、品位、品格、存在感を備えた先天的性質であり、もし仮に他の強者が「ぼくは雀聖なんだよねー」と称したところで雀聖の風格が無ければその者は遂に雀聖とはなり得ず、そうした「『風格』の無い強者」は「『貫禄』のある強者」というべきであり、なぜなら風格者は稀有である一方、貫禄者は往々にして存在するからである。では「貫禄」とは何かというと、それは本書『楡家の人びと(第一部)』における楡基一郎の様な人物を指してそう呼ぶのである。

第一部で主に扱われる題材は一代で財を為した楡基一郎の列伝、といえば誇張の感があるかもしれないが、この男について抽象化を進めて構成要素を抽出すると——虚栄心が強い、劣等感はない、自信家である、高慢ではない、前向きである、拜金主義ではない、論理がない、うさんくさい、根っからの悪人ではない……といったところか。で、こうした基一郎は院内での人望もなぜか厚く、勝又秀吉は彼をなぜか崇拜し、根拠なき治療法になぜか快方へ導かれ、よって基一郎はなぜかすごい存在として周囲に映ってしまうのだが、その「すごい」は本書の顛末に歴然だが一場の実力と威厳に過ぎず、これを「貫禄」という。

ここで貫禄とは元々、武士間における禄高からなる地位や経済力を示す俗語であり、それがヤクザ用語としての貫禄へと受け継がれたが、江戸後期から明治にかけて名を上げた国定忠治、大前田栄五郎、清水次郎長にしてみても元を正せば放埒なる無頼漢、ただただ人情だけが独り歩きしてはその実において人を害することもある稼業からして、彼らが真に正しい存在かと問われれば甚だ怪しく、つまり、貫禄とはその者の持つ威厳と悪徳が共存して進行している状態なのであり、したがって、風格者と貫禄者の違いは生来の品格の有無であり、そうなっては基一郎の風格なるものは、上っ張りで拵えた風格まがいの貫禄へと成り果てるのである。

といったことを考えながら、この感想文で私が最も言いたいことは「僕とショーン K には風格がある」って言いたい。

以上

(おわり)

## 茂吉の屈託

私は、学生時代に短歌をやっていて、サークルの短歌同人誌に斎藤茂吉の『死にたまふ母』の連作についての論文を書いたことがある。実をいうとアララギ派の歌人としての茂吉の良さは、いまいわからなかったし、『写生』というアララギ派の創作上の概念も、抽象芸術が好みの自分には反発をおぼえるものでしかなかった。万葉調をよとするアララギ派の保守的作風にやや嫌悪感があった。斎藤茂吉もあまり好きではなかった。

『楡家の人びと』の徹吉は、いうまでもなく斎藤茂吉がモデルである。この作品を読んで、斎藤家に養子に入り、長女輝子(作中では龍子)と結婚した彼の内面を垣間見て、アララギ派の権威である斎藤茂吉とは違った人となり理解できたような気がして、急に親近感を覚えた。

彼のにとっては、婿入りした医者としての斎藤家での生活は、鳥籠のような窮屈さであったのだろう。だからこそ歌人としての活動は家のしがらみから彼を自由にしたのであろう。本作には徹吉の作歌活動については触れられていないが、歌人としての斎藤茂吉だけが、本当の斎藤茂吉の実存だったとおぼしいことが、この作品を読んでいてわかった。それ以外の彼の人生にはどうしても養父である基一郎の影がつきまとう。

茂吉の息子である著者の北杜夫は、父に同情して徹吉のモノローグを描いているのがわかる。彼の屈託に思いを馳せて筆を運んでいる。

トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと』を本歌取りしながらも、明治末から昭和初期の日本の時代背景に楡家の興亡を描いているので、この作品にはやはりオリジナリティがある。

徹吉が1923年のミュンヘン一揆に遭遇するシーンや、基一郎が城吉と関東大震災に罹災し小田原から帰るシーンなどは、読み応えがあった。

福沢諭吉は“civilization”を「文明開化」と訳したが、『ブッデンブローク家の人びと』の二代目コンズルであるジャン・ブッデンブロークと比較すれば、基一郎は単なる危なっかしい山師である。civilizedされていれば、もう少し、自分の資産に気を配るだろう。無保険で火災に遭うようなことはないはずだ。

基一郎は市民階級というよりは、成金のブルジョワに近い。文明開化で西欧かぶれになっただけの多くの日本人はこんな感じのブルジョワだったのだろう。そんなことをおもった。

(おわり)